

トーマス・マンと日本

ヴィスキルヒェン, ハンス
ドイツ・トーマス・マン協会 : 会長

小黒, 康正
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授

<https://doi.org/10.15017/2230549>

出版情報 : 文藝研究. 116, pp.1-17, 2019-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :



トーマス・マンと日本

(ドイツ・トーマス・マン協会会長) ハンス・ヴィスキルヒエン 著

小 黒 康 正 訳

九州大学へのご招待につきまして、特に小黒康正教授に、もう一度心から御礼申し上げたく存じます。福岡で行う今回の講演依頼を受けましたとき、「トーマス・マンと日本」というテーマに関する私の知識はあまり十分なものではありませんでした。私知っておりましたことは、トーマス・マンに寄せる日本の読者や研究者の関心が大きいという程度のことです。しかし、それは一般的な知識でありまして、具体的な事実によって裏づけられておりませんでした。そして今、私は羞恥心を抱きながら皆さまの前に立つておりますが、それはこの数週間はじめて日本のマン受容と研究に取り組んだ後のことであります。

このことに目を向けてみますと、トーマス・マンの短編小説『トーニオ・クレイガー』がドイツで公開された一年後の一九〇四年にすでに日本で受容されていました。日本ではそれ以来、さまざまな論文でマンの影響がかなり集中的に取りまとめられてきましたが、翻訳が多くあっただけでは決してなく、研究方法の大きな広がりも見せていたのです。こうした受容は幾つもの研究報告でかなり明らかにされております。多くの異なる研究アプローチを与えられた短い時間で示すことはできませんが、私に感銘をもたらしたことは、ドイツ文学研究において近年話題

の文化学が日本ではすでにマン研究に用いられていること、加えて日本の現代文学が繰り返してトーマス・マンに取り組んできたことなのです。

九州大学におきましては、一つのことを特に指摘しておかなければなりません。それは、一九八三年から一九八七年の間に樋口忠治教授によって構築されました十三巻本トーマス・マン全集のデータベースです。それはドイツのドイツ文学研究にとりまして大きな意味を持つてきましたし、私個人にとりましても研究上の問題に出くわすたびに大いに役立ちました。

さらに指摘しておきたいのは、「ドイツ語学文学新論集」Neue Beiträge zur Germanistik シリーズの特集号「トーマス・マンのテクストにおける饒舌と沈黙」です。二〇一六年に出た同号は、トーマス・マンに関する最新研究の知的な深さと広がり強いインパクトで示しております。

さて、「トーマス・マンと日本」というテーマに対しまして、私はいかなる貢献ができましたか。私はトーマス・マンとともに日本に目を向けてみるつもりです。マンの人生や作品のどこに日本や日本人や日本文化に取り組んだ跡があるのでしょうか。そう私は問うてみるつもりです。

日本に対するマン自身の変化を言い表す印象深い文書があります。それは「日本宛ての新春挨拶」です。一九四八年の年頭に邦訳が「朝日新聞」において公にされました。挨拶の冒頭でマンは「若い頃もヴァイマル共和国の時代になっても日本に関する自分の知識は、たいていの他のドイツ人やヨーロッパ人をもつ民俗学的要素によって特徴づけられた知識を越えておりませんでした」と認めております。市民の住宅を飾る日本の磁器や繊細な漆戸棚や本棚にある数篇の和歌や富士山などが描かれた版画がここでは例として挙げられています。マンの知識は本人が公けに認めている以上のものではありません。こうしたよくある美的趣味にさらに政治的次元が加わって初めて、マンの視点は広がったのです。マンはこう書いています。「私の若い頃や男盛りの時期に現代日本史の大半が入り込

んできました。朝鮮をめぐる戦争、旅順口と遼東半島の占領、国の列強入り、日露戦争です。このようにして私が思い描いた色鮮やかな昔日の幻想の国は、現代世界の非常に現実的な要素となりました」と。

皆さんは、トーマス・マンが日本の歴史をいかに注意深く見ていたか、お分かりかと存じます。

私生活でも日本とのつながりがありました。それでマンは二〇年代の半ばから自作の邦訳を注意深く登録してきましたし、和文テキストが見本として送られてきますと作家として誇らしいことを伝えております。おまけに妻カーチャの双子の兄であるクラウス・プリングスハイムがおりました。クラウスは一九三二年に日本へ行き、ピアノと指揮と作曲の教授として東京音楽学校でポストを得たのです。作曲教師としてかなりの名声を博しました。一九三三年以降のことですが、ヒトラーのドイツと同調した日本はプリングスハイムにとりまして安全とはいえない亡命国にすぐになってしまったのです。一九三七年には音楽アカデミーから解雇されました。一九四四年の十二月にクラウス・プリングスハイムはドイツ国籍を失い、それで無国籍になってしまったのです。一九四五年には（太平洋戦争の最終局面ですが）「敵性外国人」として拘留されました。終戦後の一九四五年九月二日にプリングスハイムは双子の妹であるカーチャ・マンの家族がいる合衆国に渡りました。ロサンゼルスでは、折に触れて指揮や講演旅行があったにもかかわらず、職業的地盤を固めるには至らなかったのです。結局のところ彼は日本に戻りました。一九五一年には私立の武蔵野音楽大学における作曲と指揮の教授招聘に応じたのであります。教育活動と並んで世界中の客演指揮に招かれましたが、例えば、ロンドンBBCオーケストラ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ブルノ国立フィルハーモニー管弦楽団に招かれました。プリングスハイムの作曲は、今日では忘れられてしまいましたが、ただ日本でのみいまだ演奏されております。クラウス・プリングスハイムは一九七二年十二月七日に心不全のため東京で亡くなりました。

クラウス・プリングスハイムが妹や義理の弟と手紙で、加えて（カリフォルニアに住んでいた時期には）直接会っ

て、彼が愛していた日本について何度も話をしていたことは、疑問の余地がありません。私生活については以上です。「新春挨拶」の最後において、トーマス・マンは第二次世界大戦や日本とアメリカ合衆国との間の太平洋戦争に話が及んでいます。「この国家情勢ですと、私はドイツの不幸の始まりとなった第一次世界大戦前にドイツ帝国が置かれていた情勢をしっかりと思い出してしまいました。両国にとりまして命取りとなったのは、反動的な時代遅れと現代の産業化との混ざり合いであり、つまり技術ロマン主義なのであります。」

私は日本史に通じておりません。それでマンの見方が正しいのかどうかとも判断できません。このことはきつと今後の研究対象になるに違いありません。とはいえ確かなのは、マンが一九四五年における世界史の決定的な状況の中で日本とドイツのかんりの近さを確認し、しかも公言したことであります。

公けにしない省察、とりわけ日記の記述となりますと、以上のことがもつとはつきりと読み取れるのです。そこには戦争の経過をめぐる苦悩に満ちた見解にあふれています。その後ドイツが一九四五年五月に降伏しますと、マンの注意は太平洋戦争に移るのです。一九四五年五月以降になりますと、それまでドイツが占めていた日記上の位置を日本が占めることになりました。

トーマス・マンにとりまして敗戦時における日本とドイツの一致がどの点にあるのかは、日記における次のような記載が明らかにしてくれます。

ポツダムではイギリスとフランスの統治下にあるイタリア植民地の分割が決められた、それも「罰するために」決められたとのことだ。ドイツと日本の国民は不十分な空間に押し込められ、飢えによって激減する運命にあった。すべての人々に地球を役立てようとする目標に向かって、歩み寄ることなどない。世界整理中の三首脳が行っているのはナンセンス以外の何ものでもなく、ピアノを弾いているのだ。(一九四五年七月二十九日の日記)

最後の言葉には説明が必要です。まずマンはそこで日本とドイツをひとつのものの見方に持ち込んでいます。問題は戦争の終結であり、敗者の扱いがどうなされるべきかということなのです。ドイツと日本の戦争責任に関しましては、マンにとりまして誤解の余地がありませんでした。しかしマンにとって問題なのは両国にとって将来に展望があることでしたが、それと言いますのも、こうした超国家的な展望がひとつもなければ何も起こり得ないことが既に一九四五年においてマンには明らかだったからであります。「すべての人々に地球を役立てようとすること」、これが一九四五年以降の歴史によせるマンのまなざしでありました。「世界整理中の三首脳」をめぐるマンが日記に記載した最後の文章には、戦勝国の活動に真剣さが欠けていることに対する激しい憤りと落胆が表れています。その文章はポツダム会談に関する一九四五年七月二十一日付けニューヨーク・タイムズの詳細な記事をふまえ、アメリカ大統領トルーマンがベートルヴェンのメヌエット長調をピアノで演奏してチャーチルとスターリンを感激させたという事実と関わっているのです。

ついに一九四五年八月七日を迎え、トーマス・マンはその重大な意味をすぐに知ります。

原子爆弾の記事と数多くのユダヤ人学者が名を連ねる原爆発明の歴史のことで新聞は一杯だ。ドイツ人には崩壊が迫っていた。(中略)万象にある内奥の力は人間に役立つ。そうだとしてもその力は決しかねている。しかし頭は戦争から強制、刺激、助長を受けたのであり、さしあたり破壊目的のためだけにあつたのだ。(一九四五年八月七日の日記)

その後数日にわたりトーマス・マンは広島と長崎における原爆投下後の日本の出来事を日々追ってはコメントを付しています。ついに対日戦争も終るのです。

午後の遅い時間ラジオを付けっ放しにしておく。無条件の日本降伏、第二次世界大戦終末の緊急報道。ワシントンやニューヨークでの群集の歓喜。ロンドンでのアトリー演説、威厳あり、但しチャーチルの言及なし。サハリンにロシア人。日本人は完全に彼らの狭い島国に追い払われたが、ドイツ人絶滅と同じくらい決定的だ。というのも、原子爆弾はいわば「世界史」の終りを意味するからである。(一九四五年八月十四日の日記)

またしても日本とドイツが同一視されています。しかし最後の文はどう理解したらよいでしょうか。そこには強烈な主張が含まれており、ヨーロッパの歴史哲学に基づいてしか理解できません。ヘーゲルは「歴史哲学講義」の中で今日でも主要な見方を断定的な命題のひとつで申し立てていました。「世界史は東から西へと向かう。ヨーロッパはまぎれもなく世界史の終わり、アジアは始まりである」と。たしかにヘーゲルはアメリカのことをいまだ「未来の国」と称しておりましたが、しかし彼の歴史哲学にはできません。もともとヘーゲルは二十世紀において書き続けられていましたし、世界史の進展は西へと、つまりアメリカへと更に向けられていました。マンはこうした進歩と歴史のつながりが最初の原爆投下で取り消されたと思っています。アメリカは、おそらくこう読むことが可能かと思いますが、もはや世界史の進歩的展開を保証していません。世界史は止められており、終末に来ており、世界の西側にもはや基盤をもたなく、何か新しいものが始まらなければならないのです。

私はもうひとつの発見について言及しなければなりません。それはとある日本人芸術家との特別な結びつきに光をあてるものであります。リユーベックのブデンブローク・ハウスはオークションでトーマス・マンのポートレートを手に入れたばかりです。私たちの事後調査によりまずと、それはマンの依頼で一九五二年に合衆国で撮られた最後の写真であり、マンが簡潔明瞭に述べているように、ヨーロッパで骨をうずめるためにスイスに戻る前の写真でした。

撮影の日付は一九五二年五月二十一日と記されています。それに関する日記の記載はこうです。「食後、小テラスでコーヒー。Ch・ナイダーとその友人、友人は絵かきで、沢山の写真を自分のカメラで撮った」(一九五二年五月二十一日の日記)。一九五二年六月に七十七歳の誕生日を迎えた日にトーマス・マンは次のように書いています。「昨日、私たちがミラマー「フロリダ州南部の都市」から戻ってくると、ファーストネームが東洋という日本人が出来ばえのよい大量の私とK「カーチャ」の大判写真をもってきた」(一九五二年六月六日の日記)「一九二六年のロンドン万国写真展入賞などの」受賞写真家である宮武東洋は、一九二四年移民法の可決後にできた「リトル・東京」というロサンゼルスの一地区における芸術家集団の有力者であり、マンザナー強制収容所の公認カメラマンでもあったのです。

宮武東洋は一九九五年十月二十八日に香川県で生まれ、一九〇九年に母や二人の兄弟とともに父のいる合衆国へと移住しました。一九二〇年代から宮武は絵画や写真にのめり込むようになり、写真家としての才能ゆえ両親の猛反対を押し切ってリトル・東京にある写真学校に通い、師であり先輩であるハリー重田やエドワード・ウェストン「ともに巨匠写真家」と出会ったのです。

宮武自身のスタジオである「トロー・スタジオ」(もしくは「トロー・ミヤタケ・スタジオ」)は一九二三年にリトル・東京で開設されました。一九三二年には朝日新聞に委嘱されて夏季ロサンゼルスオリンピックの写真を撮影したのです。一九三〇年代には日本人ダンサー伊藤道雄と一緒に仕事をいたしました。この当時、宮武の芸術家としての創作活動はピクトリアリズムの影響を強く受けておりましたが、それは芸術写真の流れをくむ様式で、写真が芸術として認められることを目指していたものでありました。

一九四二年二月十九日、フランクリン・ルーズベルト大統領は「大統領令九〇六六号」に署名しました。これにより太平洋に隣接する大部分の州は封鎖区域に指定されたのです。宮武とその家族はカリフォルニア東岸にあるマ

ンザナー強制収容所に収容されました。今日そこは史跡となっています。宮武は器材を差し押さえられましたが、カメラレンズならびにイメージング・プレートを隠して持ち込み、一緒に収容されていた大工の協力を得て間に合わせのカメラを作ることになったのです。宮武は収容所生活を記録することを自らの責務と考え、後には、収容所所長の許可を得てマンザナーの日々を公式に撮ることになりました。一九四五年に一家はマンザナーを出てリトル・東京に戻ることができると、同地で写真館を再び開いたのです。特に戦後の写真は数多くの展覧会で展示されます。宮武東洋は一九七九年二月二十二日にカリフォルニアのモントレイパークで亡くなりました。

私は「トーマス・マンと日本」というテーマに関する見解を以上にとどめ、このテーマに更に取り組む際に役立つかもしれない三つの文学的観点に最後に触れておくつもりです。日本における受容を概観しますと、翻訳にしても読者や研究者にしても特に関心を抱いたのが三作品ないし一連のものであります。

まず最初にあるのがリユーベックものです。私としては、一九〇三年に刊行され、故郷リユーベック訪問を描く『トーニオ・クレーガー』や、自身の家族史に基づき、後にトーマス・マンにノーベル賞をもたらした一九〇一年の小説『ブデンブローク家の人々』への取り組みをあげておきたいと思います。それは私の推測として日本のトーマス・マン研究へのヒントになるかもしれませんが、これらの作品への愛着は似たような社会構造にどうもあるようです。親子関係に類する決定原理によって家族に大きな役割を認める日本の社会関係について、皆さんは私よりもずっとよく知っています。そこでの自由は家族主義的な社会の保護下にあるものですが、マンが成長した帝都都市リユーベックにも影響をもたらしました。マンのパスポートには国籍リユーベックと書いてあったのです。といいますのも、リユーベックは一九三七年までドイツ帝国内の独立国家として極めて特別な伝統と社会構造をもち、ドイツ帝国にあっても途切れることがなかったからであります。そうした家族ならびに社会関係の意味合いで『ブデンブローク家の人々』は読まれることができるのです。

アントーニエが本当は愛していないベンディクス・グリューンリヒとの結婚を正しい決断なのかしらと迷っていると、ヨハン・ブデンブロークは次のように娘宛てに手紙を書いています。

私たちはな、愛する娘よ、目先のことしか考えないまま自分たち自身のささやかな個人的幸福と思われるもののために生まれてきたのではない。私たちはつながりがなく一人で生きているならばらの個々の存在ではなく、鎖のように結ばれているからだ。自分たちの先に立つて行く道を示してきたご先祖さまがいなければ、今の私たちとて考えられはしない。

この例には、しかし、何か別のものも現れています。トーマス・マンは伝統というものを知っており、自分の小説をある決まりきった家族像に基づかせていますが、こうした家族像に盲目的に従ってはおりません。ここでマン芸術の中心的構成要素がかかわってきます。イロニーは、伝統をそつと取り消すことで、マンの『ブデンブローク』小説に断絶と現代性をはめ込んでいるのです。父親はたしかに基本的に正しいのかもしれませんが、しかし、この具体的な事例に関しては、『ブデンブローク家の人々』が後の見事な場面で示しているとおり、父親は判断を誤っています。アントーニエの夫であるベンディクス・グリューンリヒは遺産横領詐欺師として化けの皮を剥がしますが、破産から逃れるために縁組をしようとしたのです。ことがうまくいかないと、何もかもが離婚へと行き着くのです。

日本のマン研究において秀れた論文の多くが対象としたマンの第二長編小説は『魔の山』であります。この小説においても確認しておかなければならないのは、日本においてもすでに研究が行われていた軍隊的な男性同盟のようなテーマこそが、類似文化を生み出す同性愛的な背景として戦争を前もって準備する社会的な男性理想像ではな

いかという問いなのです。これに関して私は小説の最後に少々目を向けてみます。そこでマンは何を描いているのでしょうか。端的に言えば、突撃、犠牲行為、死であります。死とともに私たちは『魔の山』にある主要モチーフのひとつに行き着くのです。だが、このモチーフが中心的な意味を後期ロマン派的な意味層のみならず、同時代の現実にも有していたということを言葉にしたのは、一九一七年から一九二〇年までフランスの首相を務め、戦後交渉で決定的な当事者となったジョルジュ・バンジャマン・クレマンソーに他なりませんでした。

人間には生を愛することが本来そなわっております。ドイツ人にはこうした傾向がありません。ドイツ人の魂、芸術理解、思想界、文学、これらには実際に生の本質をなすもの、生の魅力、生の偉大さに対する理解が欠けています。それとの引き換えでドイツ人の心は病的で悪魔的な死へのあこがれによって満たされているのです。このような者たちは死を（中略）、ありとあらゆる装いを凝らして死をいかにして愛するのでしょうか。このことが彼らの心を占めているのであり、固定観念であります。

私は問います、ここに日本人の死生観に近いものがあるのでしょうかと。どうもそう思われるのですが、私はこの説明を行うのに向いていません。ここでまたしても大事なことは、マンが自分の小説においてドイツ人気質の基本的特徴に捕らわれないままドイツ人気質の特徴を描写していることとあります。『魔の山』は死に対する愛を克服し、こうした克服をあの有名な斜体字で書かれた文章で言い表している教養小説なのです。それは「人・間・は・善・と・愛・ゆ・え・に・み・ず・か・ら・の・思・考・の・支・配・権・を・死・に・明・け・渡・し・て・は・な・ら・な・い」という文章であります。

最後の最後で『ファウストゥス博士』にも少々目を向けておきましょう。私たちは他ならぬ世界の歴史の終末について耳にしましたし、終末の書として『ファウストゥス博士』は事実研究において繰り返し理解されてきました。

ここ日本においてもそうであります。一八七一年成立のドイツ帝国、それにもしかしますと一八六八年に成立した近代日本の帝国とともに始まり、一九四五年における両国の完全敗戦をもって終った伝統文化の終末として、この小説は読むことが可能です。そのとき、日本であれ、ドイツであれ、それまで支配的であった伝統や思考パターンとは異なるまったく新しいものが始まりました。このような古いモデルがどのようにして終焉を迎えたのかを、『ファウストウス博士』は印象的に書き表しているのです。語り手のゼレーヌ・ツァイトブロームは聖書にある黙示録の身ぶりで語りますが、しかし同時に友人アードリアン・レーヴァーキューンの芸術音楽と関連づけてのことでもあります。「ドイツの上に破壊がふりかかり、焦土と化した我々の諸都市は屍体によって肥えたネズミの巣となり、ロシアの大砲がベルリンに向って轟音をとどろかし、アングロサクソン人たちのライン渡河はまったくのたわいないことだった（中略）終末がくる、終末がくるのだ、終末はすでに生じ、それで汝、この国の住人よ、汝に襲いかかっている——だが私は語り続けるのだ。」

以上は、ドイツと日本に見られるある種の「魂の同質性」を指摘しているようなアスペクトであり、場合によってはマン研究にとって肥沃な畑であることがおそらく明らかとなるアスペクトでありました。従いまして、以上の追及が、そして更なる追及が将来にわたり今まで以上に頻繁かつ集中して行われること、お互いが一層力強く協力し合うこと、こうした協力が一方通行に陥らないことに私は賛意を表します。といいますのも、こうした目的のために日本のトーマス・マン研究が実に高い水準にあるからなのです。

訳者解説

ここに訳出した文章は、二〇一八年三月十日（土）に九州大学文学部（旧箱崎キャンパス）で開催された「ト

マス・マン書簡の公開記念式典」においてハンス・ヴィスキルヒェン氏がドイツ語で行なった講演の原稿である。同氏は時間の関係でかなりの部分を省いて原稿を読み上げられたが、本訳出では若干の省略を除いて原稿に近い形で訳した。以下、まずは式典開催の経緯を説明し、その上で本講演の講演者と内容について解説を行う。

二〇一七年六月、トーマス・マンの書簡五通と元九州大学教授である高橋義孝氏の研究ノートが九州大学に寄贈された。寄贈者は中山宗春氏と中山周氏（高橋義孝氏の次女）のご夫妻である。寄贈書簡五通の内、一通はコピー、三通はタイプ、一通は直筆で、いずれもマン研究にとって貴重な研究資料であった。そこで、関係者が協議した結果、記念式典を行なった上で今回の寄贈品を九州大学附属図書館の貴重図書として受け入れることになったのである。なお、寄贈品の詳細に関しては、「トーマス・マンの日本人宛て五書簡」（小黒康正訳、九州大学大学院人文科学研究院『文学研究』第一一五輯、二〇一八年、一二七―一四八頁）にあるので、そちらを参照していただきたい。

記念式典は、水戸から中山ご夫妻、ドイツのリューベックからトーマス・マン協会のハンス・ヴィスキルヒェン会長を招き、九州大学大学院人文科学研究院の主催、九州大学附属図書館と日本独文学会西日本支部と西日本日独協会の三団体による後援という形で、五十名をこえる参加者を得て行われた。式典では、始めに久保智之研究院長の挨拶があり、続けて当方による寄贈品の紹介があった後、中山ご夫妻への感謝状贈呈が附属図書館長の宮本一夫教授によって行われ、最後にヴィスキルヒェン会長が記念講演を行なったのである。なお、講演の通訳は当方が担当した。

さて、ヴィスキルヒェン氏はリューベック市を活動の拠点とする「ドイツ・トーマス・マン協会」の会長であり、同市にある「ブデンプローク・ハウス」、「ギンター・グラス・ハウス」、「自然環境博物館」などの十一の文化施設の館長としても、獅子奮迅の活躍をされている方である。言うまでもなく、同会長はトーマス・マン研究の第一人者であり、一九八六年に上梓された『小説における時代史——トーマス・マンの《魔の山》と《ファウストゥス

博士』に『Zeitgeschichte im Roman. Zu Thomas Manns *Zauberberg* und *Doktor Faustus*』は当時のマン研究において最も高く評価され、今なお重要な基本文献に他ならない。

二〇一七年九月にバイエルン州のバート・テルツでトーマス・マン協会の秋学会が行われた際、当方がヴィスキルヒェン氏に今回の寄贈について報告したことで、来日の話が一挙に進んだ。同氏がすぐに快諾された理由は、日本独文学会機関紙「ドイツ文学」一五三号（二〇一六年発行のドイツ語による国際誌）の特集「トーマス・マンのテキストにおける饒舌と沈黙」Redseligkeit und Stillschweigen in Texten Thomas Mannsで特集責任者の当方が同氏と協力して編集を行ったこと、そして、世界中のマン研究者が今なお活用している世界で唯一のデータベースが九州大学によって公開されていること、以上の二点にあらう。しかもこの二点を通じて九州大学は世界のマン研究に重要な貢献をしている、とヴィスキルヒェン氏は言う。ここで話題になったデータベースとは、ドイツで刊行された十三巻のマン全集が九州大学の樋口忠治教授（当時）によってすべて打ち込み入力された後、一九八七年七月に「トーマス・マン・ファイル」として公開されたもので、二〇一六年七月以降は九州大学大学院言語文化研究院のホームページ（<http://www.flc.kyushu-u.ac.jp/~hgmc/>）を通じて「樋口・ゲート・メン・コーパス」Higuchi GM Corpusとして公開されている。

ヴィスキルヒェン会長は、二〇一八年三月六日に来日され、翌日に京都の龍谷大学で行われたドイツ語による国際シンポジウム「Thomas-Mann-Symposium 2018 Kyoto」にまずは参加された。このシンポジウムは、科学研究費補助金「ドイツの文学・思想におけるトポスとしての〈黙示録文化〉——〈終末〉の終末は可能か——」（基盤研究B、課題番号二六二八四〇四八）の助成を受けて当方企画の第九回九大独文科研研究会として行われたものである。また、同時に九州大学文学部独文学研究室に事務局をおく「トーマス・マン研究会」の三十周年記念行事でもあった。当日は、日本全国から集まった三十名を超えるマンの研究者や愛読者を前にして、トーマス・ペーカー（学習

院大学)、小黒康正(九州大学)、今井敦(龍谷大学)、以上の三名が研究発表を行い、最後にヴィスキルヒエン会長が特別講演「トーマス・マンとゲーテとドイツ史」Thomas Mann, Goethe und die deutsche Geschichteを担当されたのである。

その後、ヴィスキルヒエン氏は三月九日に福岡入りされ、十日に私の案内で九大箱崎キャンパスの近くにある筈崎宮を中山ご夫妻とともに見学した後、「トーマス・マン書簡の公開記念式典」に参加された。講演「トーマス・マンと日本」では、マンに関する日本での受容や研究にまずは話が及ぶ。日本では『トーニオ・クレイガー』刊行一年後の一九〇四年に既に邦訳が出たこと、それ以来マンの著作が繰り返し翻訳され今なお盛んに研究され続けていること、マン文学が現代日本文学にも影響を与えていること、同会長自身も九州大学のデータベースを何度も利用していること、「ドイツ文学」一五三号のマン特集が最新研究の深さと広がりを見事に示していることなど、以上が話題になったのである。なお、日本におけるマン受容やマン研究については、日本独文学会の委託で私がドイツ語にて編纂した次の報告と書誌が詳しい。

- Thomas Mann in Japan - Rezeption und neuere Forschung. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Band 3 / Heft 4. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. München 2004. S.143-152.
- Thomas Mann in Japan - Neue Bibliographie. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Band 3 / Heft 4. Hrsg. von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. 2004 München. S.153-277.

講演では、マンの私生活における日本との関わりも話題となった。マンの夫人であるカーチャが双子として生まれており、その兄であるクラウス・プリングスハイムが日本の音楽教育に多大な貢献をしたことはあまり知られて

いない。クラウスは一九三一年に來日して東京音楽学校で指導を行なった。もともと、一九三七年にユダヤ系ゆえに同校を解雇され、一九四四年にドイツ国籍を失って無国籍者となり、加えて一九四五年に「敵性外国人」として拘留の憂き目にあったこともあり、終戦後の同年九月二日に妹や義弟を頼ってカリフォルニアに移住したが、武蔵野音楽大学からの教授招聘に応じるために一九五一年に日本に再び戻り、一九七二年十二月七日に心不全のため東京で亡くなった人物である。なお、クラウスの息子であるハンス・エーリク・プリングスハイムが日本でジャーナリストや映画評論家として活躍した人物であることも、附言しておきたい。また、マンが一九五二年に亡命先のアメリカからスイスに移り住む際に最後の写真を依頼した宮武東洋についても、詳しく報告されている。著名な日本人写真家が一九五二年五月二十一日に撮した写真は、アメリカにおける最後のマンのポートレートとしてマン家にとって大事な思い出の写真となり、オークションを通じて近年ブデンブローク・ハウス所有のものとなった。クラウス・プリングスハイムと宮武東洋という二人の人物を通じて、マンの私生活における日本との関わりをヴィスキルヒエン氏は明らかにしたのである。

ヴィスキルヒエン氏は、マンと日本の私的関係の他に、マンが戦中戦後の日本に強い関心を示していたことも指摘された。このことは研究者の間でもあまり知られていないが、実際、ヴィスキルヒエン氏自身もそうした事実の重要性を日本に招かれたことを契機に認識したと告白されている。日本に対するマンの関心は、当初、当時のヨーロッパ人と同様に、工芸品にしか向けられていなかった。しかし、一九四八年の年頭に「朝日新聞」に掲載された「日本宛ての新春挨拶」が示すように、後にマンは日本の動向に強い関心を抱くようになったのである。その上でマンは書いたのである、ドイツと日本にとって命取りとなったのが「反動的な時代遅れと現代の産業化との混ざり合いであり、つまり技術ロマン主義なのであります」と。かねてよりヴィスキルヒエン氏の研究を通じて私たちの知るところによれば、ナチスと戦った第二次世界大戦時のマンは、西欧文明の政治性とドイツ文化の非政治性の対立

を反動的に意識していた第一次世界大戦時の頃とは違い、ロマン主義が産業を通じて国力をつけたドイツにおいて極めて排他的な暴力と結びつき、いまや墮落したロマン主義に成り果てていると見ていたのである。マン自身は、ナチスに抵抗した「ヒューマニスト」として、あるいは晩年の諸活動を通じて「ヨーロッパの良心」としてどんなに賞賛されたところで、かつて第一次世界大戦勃発時に自らの知的抑制を振り切って開戦の熱狂に加わったことを忘れてはいなかった。事実、マンは、ロマン主義的内面性の非合理的志向を反動的に強調した時期を経て、そうした志向がはらむ危険性を時局との対峙を通じてはつきりと意識するようになる、ロマン主義的内面性に啓蒙主義的な批判理性や精神的なコスモポリタニズムを何とか結びつけようと試みたのである。

こうした状況の中で、日本がアメリカとの開戦に踏み切ったことを知ったマンは、「新春挨拶」の最後に書いてあるように、「第一次世界大戦前にドイツ帝国が置かれていた情勢」を思い出した。マンの意識が次第に日本にも向けられていただけに、「それまでにドイツが占めていた日記上の位置に日本がつくことになります」とヴィスキルヒェン氏は言う。マンの新たな意識は私たちに歴史的省察を改めて促す。と言うのも、私たちは第二次世界大戦時の日独に共通する政治的情勢だけではなく、第一次世界大戦時のドイツと第二次世界大戦時の日本に共通する精神的状況を思い出すからである。Donald・キーン『日本人の戦争 作家の日記を読む』（角地幸男訳、文春文庫、二〇一一年）によれば、日本の太平洋戦争突入から敗戦にかけて、愛国主義の示威に侮蔑感を表明し続けてた永井荷風や時局に無関心を通し続けた内田百閒のような人物もいたが、主戦論者として敗戦後も戦争支持の記事を書き続けた徳富蘇峰、戦争支持の思いを歌った斎藤茂吉や高村光太郎、かつて左翼文芸評論の中心的人物でありながら開戦を知って「天皇陛下の臣下として一死報国の時が来た」と書いた青野季吉、日本の勝利に最後まで揺るがぬ自信を抱いていたSF作家の海野十三、英文学の研究者であり翻訳者でありながら英米との戦争に狂喜した伊藤整など、戦争を熱烈に支持した日本の文学者は少なくなかったと言えよう。ドイツ語圏の代表的な知識人たちが第一次世界

大戦時に戦争を熱烈に支持したことは、私たちにとって決して他人事ではないのである。

ヴァイスキルヒェン氏は、日本のマン研究が有する高い水準を今一度賞賛し、ドイツと日本のマン研究者が今後とも一層協力し合うことを祈念しながら講演を終えられた。以上の記念式典については、式典前の三月二日のお昼と夕刻ならびに式典後の三月十一日早朝のNHKニュース福岡版にて、そして六月十二日付の朝日新聞朝刊で報道され、世間の耳目を集めたことも、併せて報告しておきたい。朝日新聞によれば、「九州大学はマン研究の拠点として知られており、今回の寄贈でさらに内容が充実することになる」とのことであった。それだけに私たちは、今回の企画を単なる記念行事として終わらしてはいけない。繰り返しになるが、ヴァイスキルヒェン氏は講演の最後で日独の研究者が「一層力強く協力し合うこと、こうした協力が一方通行に陥らないこと」を祈念された。日本に対するマンの関心を通じて「魂の同質性」を知った私たちにとって、そうした祈念の意味は大きいのである。